２０２０年１２月　２５日	会報１２４号 かわち野に吹く風	東大阪文化財を学ぶ会 会長　　南　　光 弘

摂津の住吉社巡り　　◎小雨決行（警報発令中止）

１．日　　時　２０２１年1月２１日（木）午前９時３０分　（解散　午後２時３０分頃）
２．集合場所　阪神なんば線（近鉄直通）　千鳥橋駅改札口附近
３．持 ち 物　弁当、飲み物、敷物　雨具など。マスクの着用は必須。お願いします。
４．参 加 費　無料
５．行　　程　徒歩約７～８㎞
　千鳥橋→元官幣社・鴉宮→澪標住吉神社→傳法山西念寺→伝法駅＝福駅　福住吉神社→大野川緑陰公園（昼食）→大和田城跡（大和田小学校内）→住吉神社（大和田）→田蓑神社（佃煮、佃漁民ゆかりの地）→千舟駅

≪住吉三神≫
　住吉三神の誕生を伝えるのは、『日本書紀』
　黄泉から辛うじて逃げ帰ってきた伊弉諾尊。「我が身の穢れを洗い去ろう」と、筑紫の日向の小戸の橘の檍原（あわぎはら）に至って、禊祓（みそぎはらい）をする。この禊祓の中で誕生するのが「住吉三神」。
　（川で禊祓したあと）また、海の底に沈んで濯（そそ）いだ。これによって神を生んだ。名を底津少童命（そこつわたつみのみこと）と言う。次に底筒男命。また潮の中に潜って濯いだ。これに因って神を生んだ。名を中津少童命と言う。次に中筒男命。また潮の上に浮いて濯いだ。これに因って神を生んだ。名を表津少童命と言う。次に表筒男命。その中の底筒男命・中筒男命・表筒男命は、これが住吉大神である。底津少童命、 中津少童命、表津少童命は、安曇連らが祭る神である。
　安曇氏（あずみ・阿曇氏）は、海神（わたつみ）「綿津見命」を祖神とし海人を束ねた宗主。大陸交易に力を発揮した氏族。この説話は、後の歴史時代になって、神功皇后伝承によって「航海安全」の神威を獲得するようになるわけで、それを見越して設定されたという。
　なお、『古事記」においても、『日本書紀』とほぼ同じ伝承になっている。
　住吉三神と縁が深いのは神功皇后。神功皇后は住吉三神の神助を得ることで戦に勝ち、八幡信仰の中心的な神様になっていく。モーレツな戦う女性。この神功皇后の息子が応神天皇、誉田別命である。
さて、仲哀８年、仲哀天皇は熊襲討伐のため、神功皇后とともに筑紫へ遠征。橿日宮に居るとき、神が皇后を通じて新羅征討の神託を下したのだが、仲哀天皇は信用せず神託を無視。熊襲討伐を強行した結果、あっけなく敗走、神罰を受けて崩御してしまったという事態になる。
　≪八幡三神≫
　宇佐八幡神社を総社とする八幡宮は「やはたのかみ」と呼ばれることや、「誉田別命（ほんだわけのみこと）」とも呼ばれる神様で、第 15 代天皇の応神天皇と同一とされている。多くの八幡宮では、応神天皇を主神として比売神（ひめがみ）や応神天皇の母である神功皇后を合わせて八幡三神として祀っている。また、八幡三神のうち、比売神や神功皇后に代わり、応神天皇の父である仲哀天皇や武内宿禰（たけしうちのすくね）、玉依姫命（たまよりひめ）を祀る神社もある。

①　元官幣社・鴉宮（傳母頭神社・もりす神社）
　仏教伝来の地として、桜井の海石榴市（つばいち）は、よく知られている。『日本書紀』によると、欽明 13 年（552）、百済聖明王の使者、怒唎斯到契（ぬりしちけい）が、この地に釈迦仏の金銅像や経典を献上したとあり、それをもって日本に仏教が伝来したとされている。なお、上宮聖徳法王帝説や元興寺伽藍縁起では、欽明７（538）としている。現在は，仏教公伝を５３８年とするのが通説となっている。
　※仏教公伝は、仏・法・僧が揃っていることをいう。百済聖明王は、僧侶を送っていない。
　しかし、ここ伝法にも仏教伝来の話がある。それは、海石榴市よりも早く、宣化３年（538）、外海から

難所難波津の内海へ入港する時、沖にある伝法島の当地に着岸しわが国で初めてとなる仏法経論・仏像・が百済の使者阿直岐（あちき）、王仁（わに）によって渡来したという。※応神天皇の時代の渡来人

祭神は、天照皇大神、住吉大神（四神）、神使霊烏　八咫烏（やたがらす）、恵美須大神、市杵島比売大神（水神・宇賀弁財天）となっている。

神社の創建は、由緒書に次のように書かれている。

「建保３年（1215）、伝法町開拓のため村と港、全国の隆盛繁栄を祈願し、湾岸地域の総鎮守神として旧社名、傳母頭（もりす）神社が建立されたという。」その後、「文禄元年（1592）豊臣秀吉、瀬戸内より日本海彼地への渡航に際し、当社へ参拝に訪れ神前に厄除、無病息災、海路安全無事、他の祈願を行う。奇しき事に神主夢中、社殿奥の森より三足の霊鳥八咫烏（やたがらす）が出現し航海の安全守護、瑞祥を示さんとの神告があり、翌朝太閤に謁を請い言上したところ旅の成功を知らせる吉兆と大いに喜ぶ。出発に際し、傳母頭神社、神主田中八太夫を水先奉行に抜擢したところ、お告げ通り八咫烏が出現、航海の安全無事他など霊鳥吉運に導かれ、翌年正月に満願叶い無事平安に帰国を果した。太閤この事に大いに感激し自ら祭主を勤め報告祭典を執行せられ、この時傳母頭神社名を改め以後「鴉宮」と称え、神領として船舶入津料の権利を認める（後の大坂船奉行所の前進となる）当社境内東隅にあたる森林鬱蒼たる鴉の巣を成している所を選定し御墨付本宮社として、御遷宮並びに三柱大神の木彫神像を賜り名誉と経済的利益の両面で支援をした。殊に海上での八咫烏の導きを伝えるため住吉神像の杖の上に壱羽の守護八咫烏が止まる如きは全国的に類例が無く貴重な御神像です。」と。

≪国登録有形文化財の社殿、拝殿≫

拝殿の表側は八咫烏、裏側には千成瓢箪纏の彫刻が施されている。

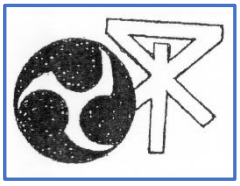
≪活躍する伝法の鴻池一族≫鴻池屋の祖、山中新六幸元からの分家、鴻池忠治郎

天正 6 年（1578）父・山中鹿之助幸盛（尼子氏の家臣）が亡くなる。9 歳の幸元、伊丹鴻池村の大叔父、山中信長に養われる。慶長 5 年年（1600）伊丹の酒、清酒の醸造に成功、これより「鴻池屋」と称す。

元和 5 年（1619）大坂、内久宝寺町に店舗。海運業を営む。「下りもの」といわれた伊丹と池田の酒を江戸に運ぶ。帰路は米、薬種、大豆、大名の米穀を大坂へ運び財をなす。新六の八男、正成が分家を立て江戸への廻漕業を拡大し、参勤交代の大名の荷物を扱うようになり、蔵物など大名の物流を差配するようになった。その関係で大名貸が始まる。明暦 2 年（1656）に両替商を開店。寛文 10 年（1670）には幕府御用の両替商になった。この正成が今橋鴻池家の初代善右衛門とされている。

幸元の子どもらのうち大坂で分家したものは３家、そこからさらに９家が分かれた。今橋鴻池家とは別筋で大坂の西成郡北伝法村（現在は大阪市此花区）に 17 世紀頃から居を構えた鴻池家がある。当家は六軒屋と称し、廻船業などを営んでいたが、明治 4 年（1871）鴻池忠治郎が土木や建設に手を広げ、淀川改良工事に貢献。淀川の洪水に際して被害地の復旧に全力を挙げた。その後、事業は鴻池組や鴻池運輸となって発展した。

② 澪標（みおつくし）住吉神社



主祭神は、住吉四柱（住吉三神＋神功皇后）、天照大神、神日本磐余彦命、応神天皇。

社名に「澪標」が付くのは、社伝によれば、延暦 23 年（804）、遣唐使の航路安全を祈願して祭壇を設け、彼らを乗せた帰国船を無事に迎えるという意味を込めて澪標が建てられたのだという。澪標はじつに千年以上の長きにわたり航路の安全を支えた功労者といえる。

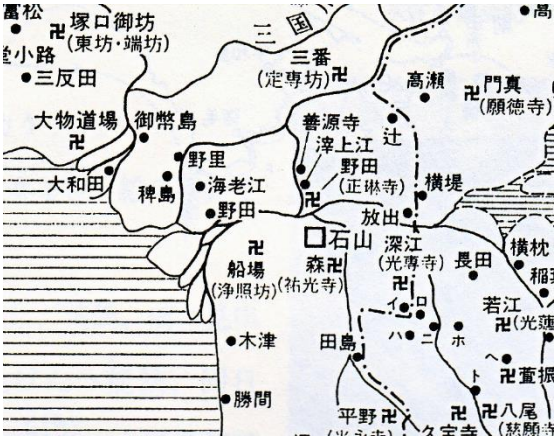
澪標とは、大坂の浅瀬の港に打たれた杭。遠くからやってきた船でも迷わないようにするために、入港の航路を示したものだ。「水脈」すなわち「水緒つ串」の意味である。とくに難波は水路が多くて迷いやすかったため、難波の澪標がよく知られている。

当時、澪標がいかに活用されていたかを物語るのが、天保 5 年（1834）に制作された『大湊一覧』である。ここには、大坂港にぞくぞくと入ってくる多くの船が描かれているが、それらの船のそばには、等間隔で並んだ澪標がある。大坂港には、大坂と江戸を定期的に往復する菱垣廻船、伊丹の酒などを積んだ樽廻船などのほか、日本海沿岸から下関を通り、瀬戸内海を通って大坂へ来る北前船な四国からの宇和島船、九州からの肥後

船、日向船など、さまざまな船が入ってきた。
　元禄 11 年 1698）には、こうした大型船の積み荷の積み下ろしや積み込みを行なう小型船である上荷船や茶船が 3623 艘も登録され、さらに宝永２年（1705）には、上荷船だけで 4563 艘にもなった。いかに多くの積み荷が大坂湾に集まっていたかがわかる。
　こうした膨大な数の船が澪標を願力に大坂周辺の川や海を往来していたのである。現在では、澪標そのものは撤去されて見ることはできないが、此花区にある澪標住吉神社の境内の入り口には、そのモニュメントが設置されている。

③　伝法官寺元摩耶　傳法山西念寺
　西念寺本堂。本尊は阿弥陀如来坐像。他に伝法千手観音像（平安時代の本尊）、元摩耶観音（秘仏）、法道仙人像（秘仏）を祀る。本堂の前には法然上人が 15 歳の時現在の岡山の誕生寺から京都に向け、旅立ったという「旅立ち姿像」が建てられている。
　西念寺創建は、大化元年（645）、天竺南山道宥律師の教伝により、法道仙人が仏法伝導道場を建立されたのがはじまりという。平安時代、８０６年（大同元年）空海が中興。真言密教の根本道場を建立し、鎌倉時代末期までは真言宗として栄えた。
　昌泰４年（901）菅原道真が大宰府に左遷途中、出航までの数日を塔頭に逗留し、本坊にも度々参詣したという伝承がある。仏教、儒教、道教の道場で、日本最古の納骨霊場ならびに神仏習合の寺院といわれている。天神、地蔵、観音、弘法大師、龍神を信仰する霊場であり、伝法山、高野山、摩耶山の三観音巡礼が平安時代から始まりまったとう。※摩耶山天上寺。法道仙人の開創。高野山真言宗大本山。摩耶夫人（釈迦生母）を本尊とする日本唯一の寺である。
　法道仙人は雲に乗って、インドから中国、朝鮮を経て日本にやってきたと伝わっており、法道仙人を開基とする寺院は近畿地方（主に兵庫県）に極めて数多く、播磨だけでも 60 ヶ寺、丹波や摂津を含めると 100 ヶ寺を越えるといわれている。また、法道仙人が日本に渡るときに、共に渡ってきた「牛頭天王（ごずてんのう）」は、姫路市の広峰神社（ひろみねじんじゃ）に祀られ、その後、八坂神社（やさかじんじゃ）中の座に祀られたとされている。
※地名「伝法」のもう一つの由来がある。鳥羽上皇が高野山に建立した伝法院の用材を当地で船積みをしたところから名が起こった。という。

④　福住吉神社
　祭神は、住吉四柱大神（表筒男命、中筒男命、底筒男命、神功皇后）
　新しい開拓地、新田開発が慶長年間より行われ、正保元年頃（1644）より住民が住み着きはじた。次第に集落が形成され、それに伴い人々の心の寄りどころとしての氏神の創設が始まった。住民の一部が農耕に従事したとは云へ、主として海の漁を主体とするため、航海の安全と豊漁を願って、明暦２年（1658）村落の北にあたる地の神崎川沿ひに宮地を築上げ、住吉大神を勧請したのが当神社の始まりであるという。



⑤　大和田城跡（大和田小学校内）
　天正３年（1575 年）の石山合戦時に、石山本願寺の支城として大和田に砦が築かれ、荒木村重軍が駐屯していた神崎や渡辺へ攻め込み一旦敗走させているが、逆に荒木軍は本願寺軍を十三の渡しにおびき出してこれを破り、大和田や天満の砦を落していった。
　翌天正４年（1576 年）、織田信長は村重に命じ、尼崎城（大物城）、花隈城、能勢城、三田城、多田城、茨木城、高槻城、有岡城、そして大和田城の改修や築城をさせ石山本願寺を牽制するための、毛利水軍と石山本願寺軍の補給路を断つ重要な拠点でもあった。

⑥　住吉神社（大和田）

祭神は、住吉四柱大神（表筒男命、中筒男命、底筒男命、神功皇后）

境内に「判官松の碑」が立っている。説明書には、

「元暦元年辰 2 月源九郎判官義経公、木曽義仲を近江に破り、つづいて兵庫福原に陣する平氏を攻める為、下向の節に当浦に碇を下されて、住吉の神に戦勝祈願をされ、庄屋の家敷にご休憩の折、三宝に松を植えて、御祝儀申し上げたところ、非常に喜ばれ、記念として松樹を当社の西南方一町の地東西 15 間南北 3 間の小丘上に植樹せられました。時の人、これを判官松と唱えたと後世に伝えられています。」という。

⑦　田蓑神社

祭神は、住吉の四柱（表筒男命、中筒男命、底筒男命、神功皇后）

貞観 11 年（869 年）9 月鎮座、田蓑嶋神社。寛保元年（1741）9 月に住吉神社と改名、明治元年（1868 年）に田蓑神社となる。

14 代仲哀天皇の妻である神功皇后が新羅に出兵する際に住吉大神を守り神とし、その帰途この地に立ち寄った時に、海士が白魚を献上されてより、その海士を奉ったとされている。後の世、当地開拓の時その海士が出現し、神功皇后の御船の鬼板を伝え守って数百年、この神宝を安置して住吉大明神をお奉りせよと申され、貞観 11 年（869）に創建され、住吉三神と神功皇后の「住吉四神」を祀ったという。

≪徳川家康と田蓑神社≫

天正年間、徳川家康この地に立ちよられ多田神社に参詣の折、田蓑嶋漁夫等、漁船を使って、神崎川の渡船を勤めた縁により、漁民等には「全国どこで漁をしても良し又、税はいらない」という特別のご褒美をいただき漁業の一方、田も作れと命じられた折に、田蓑嶋を佃と改め、後、寛永 8 年（1631）田蓑嶋神社内に、徳川家康が奉られることになった。

≪佃漁民ゆかりの地≫

天正 18 年（1590）8 月 1 日家康が関東へ下る際、田蓑神社宮司平岡正太夫の弟、権太夫好次を含む 34 人の村人が江戸へ下った。後に幕府より干潟を賜り、故郷の名をとり佃島と定め、田蓑神社の分神霊を勧請した。これが、佃煮発祥の地として有名な、東京の佃島と同地の住吉神社の起源となる。

（寄稿文）

お伊勢さん

並松　昌子

狂ったように続く猛暑に、少しばかり恐れをなしていたが、10 月半ば、その暑さがひっそりと影を潜め、秋の気配が忍び寄って来た。折を見計らっていたように『歴史を学ぶ会』から伊勢参りの計画を聞く。今年は遷宮の年であり、夫と私の年令を考えるとこれが最後のチャンスかもしれないと思い、秋晴れの好き日に伊勢参りに出かけた。

伊勢神宮へは小学校の修学旅行以来だ。意外にも同行のメンバーも、概ねそんな様子だ。

正式参拝だからと服装はスーツ、もしくはそれに準ずるものと注意があり、真面目に行儀よく男性はスーツにネクタイ、女性もそれに倣った服装でバスに乗り込む。少し窮屈でも神妙に我慢しているようす。何と言っても伊勢参りだから。小学校の修学旅行と言えば、昔はほとんど伊勢神宮だったためか、『お伊勢さん』にはどこの神宮よりも特別で別格の印象があった。

バスの中で説明を聞き、にわかに勉強するも確かに別格である。伊勢神宮は内宮と外宮の二つの正宮があり、125 のお宮・お社からなる。内宮の『天照大神』は皇祖神であり、日本文化の大本を神としたもの。外宮の『豊受大神』は豊かで神聖な食物をあらわし神としたもの。総称神宮は神の宮殿である。

式年遷宮とは、社殿を 20 年毎に新造し、更に殿内のお装束、神宝を新調してご神霊を新宮へお遷しする祭儀のこと。準備期間が 8 年も掛かり、何と 1300 年もの間続けられ今年は 62 回目とのこと。何故そんなご大層なことが続けられるのか、主な理由を教わる。

一番大きな理由は、社殿の耐久限度が 20 年とされていること。次に 20 年を一区切りとする歴史観、人生観を拠り所に宮大工、工匠の伝統技術を次の世代に継承すること。

それから糒（ほしい）の貯蔵年限を 20 年と定めていること。
これらが主な理由とされているが、掛かる費用は 550 億円、その 6 割は積み立て、残りは募財だそうだ。
気の遠くなるような話ばかりだが、そうしなくては伊勢神宮は存続できないのだろうか。
いくつか素朴な質問がある。
まず、社殿の耐久年数をもっと長くするために工法を変えればいい。これは実際提案者もいたらしいが、建てられた当時のままを再現することが伊勢神宮であるとあっさり却下。
次に資材について。使用する檜はとっくに伊勢の物では足らず、木曽の檜を使っている。ならばもっと強いけや木や楠を使えばいい。だが檜でなければならず、既に 200 年後を見越して植林しているという。
誰が何と言おうと、狭い国土に広大な宮殿を有し、天皇が神ではなくなった現代にも式年遷宮は行われ、千年変わらずあり続けるのが伊勢神宮なのだ。
森と水と土は米を巡る民族の文化である。これを再現するのが神宮の祭りであって古代を再現する営みでもある。伊勢神宮は民族の心、即ち『日本民族』そのものをあらわしていると教わる。誰に強制されなくとも私を含めて多くの日本人が、今日も明日も各地の神宮や大社にお参りする。それこそが遷宮やあらゆる祭事を支える原動力。古代人が築いてきた伝統を私達は誇りに思い、日本民族であることに胸を張りたい。伊勢神宮はその象徴だ。
いよいよバスで外宮へと移動、さすがに新しい社殿はヒノキの香りが清々しい。「学ぶ会」のメンバーは社殿の横の一画で、特別なお祓いを受けた。そのあと思いがけなく神楽殿に案内され、一般参拝では見ることのない神楽舞を見せてもらった。
まず、うやうやしく祝詞があげられ、内容は日本語かと耳を疑うほどチンプンカンプンだが、氏子総代で名前が読み上げられると祝詞はがぜんありがたい意味を持つ。
６人の神官による笛、太鼓、笙などの雅楽に合わせ、10 人ほどの巫女が入れ代わり立ち代わり神楽を舞う。巫女の舞は一分の乱れもなく、板の間に正座して観ている私達からは、咳払い一つ聞こえない。緊張した雰囲気は厳粛そのもの。ピンと張りつめた空気の中を神官も巫女も、長い袴の裾を見事にさばいて宮中の人のように優雅に振舞う。古代と現代がこの空間に隣り合わせにあるようだ。
やがて参拝を終え、立ち上がる時は足が痛くて、お互いの顔を見合わせた。口々に「えらい有り難い、ちょっと見られないものを見せてもらって」と緊張が解けて苦笑い。正式参拝ならではの素晴らしい伊勢参りだった。やがて堅苦しいお参りから解放され、「おかげ横丁」で名物伊勢うどんと手ごね寿司を頂く。もっちりと柔らかく暖かな甘辛いだしが絡まって美味しい。老若男女の行き交う中で「お伊勢さん」の温もりを味わう。
良いお陰がいただけますように…そう願って帰途についた。

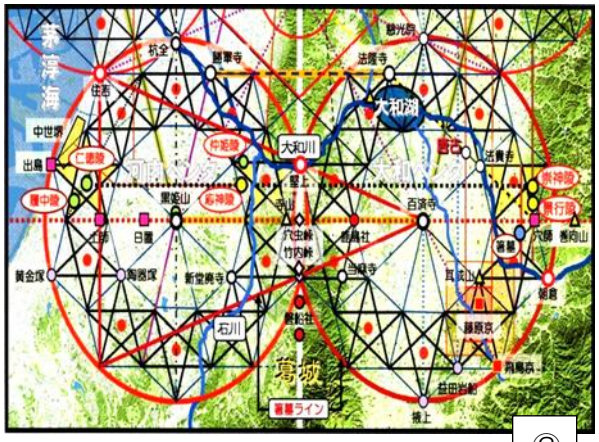
百舌鳥・古市古墳群プランニングの秘密

～５世紀の短期間に、なぜ相似形の巨大古墳を大量に造ることができたか～

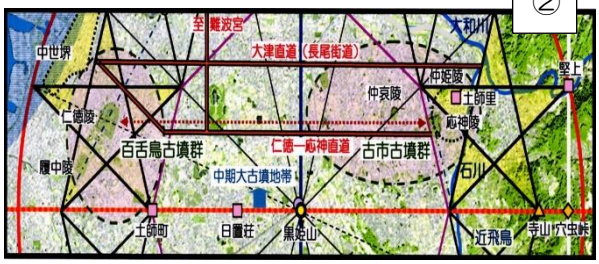
清水　守民

１．百舌鳥・古市古墳群のランドプラン
お話はこの地域での築造状況にはある「不思議なルール」があることから始まりました。
「百舌鳥・古市古墳群」が東西の五芒星結界に沿ってプロットできます。（図①と②）
河内の五世紀巨大古墳は北半部に集中し、直道で結合しています。百舌鳥古墳群は西五芒星の真ん中、中軸線に「伝仁徳陵」を配置して展開し、古市古墳群は東五芒星の左袖サークルに沿って「伝仲姫陵」「伝応神陵」と築造され、次第に西側に展開。ここを起点に石川西岸・古市古墳群の展開となります。で、この二大巨大古墳のうち伝仁徳陵は少雨地域の灌漑用水の役割も、伝応神陵は石川の氾濫を制する役割も果たしていました。共にあらかじめ企画された「ランドプラン」があったことがわかります。
実はこの大和河内連環結界には「３世紀の箸墓」設計が内蔵されており、古墳時代初期からの存在がうかがわれます。そして５世紀に至り突如何らかの大集団がこの地に「流入」し、先在する五芒星結界ルールに従って巨大古墳群を営んだことが考えられます。
２．中期巨大前方後円墳の築造プラン

①



②

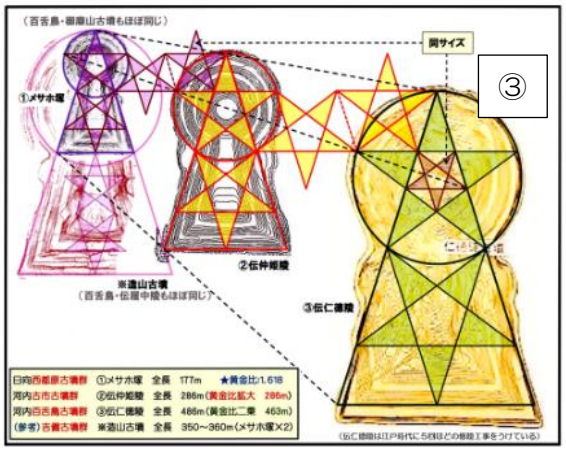


さて「この頃に大量の流入者」とは一体何をさすのでしょうか。この時期に伝えられる記録として、『記紀』では応神天皇が「遠征先の九州から反乱軍を制圧するために進攻した」、『宋書・倭国伝』では倭讃から始まる「倭の五王」の初動時期に相当します。

この『記紀』と「古墳」に絡まる事柄で、考古学者の森浩一さんが面白い指摘をしています。

「中期型初頭の前方後円墳で宮崎・西都原メサホ塚のちょうど２倍が伝履中陵、仁徳天皇と妃・髪長媛の伝説から河内と日向は深い関係があるのでは」という内容です。（図③）

西都原古墳群は前期古墳時代に営々と築かれた大古墳群で、メサホ塚を最後に築造が途絶えるという不思議な古墳群です。で、ここでのランドプランにも五芒星設計が入っています。メサホ塚は、五芒星を二つ組み合わせての「ダブルペンタ構造」が実に見事で、実は中期型前葉の前方後円墳は大小の差こそあれ、すべてがこの相似形になっています。おそらくこの「設計図共有」が中期古墳の大ブレイク現象をもたらしたのでしょう。



③

中期古墳初期の「伝仲姫陵」は前方部３段後円部４段の典型的な中期古墳（日向・西都原「メサホ塚」の黄金比倍）。五芒星を逆向きにくっつけた「ダブルペンタ構造」の中にスッポリと包まれる外形を持っています。この五芒星形の交点を上手につなげてやると、外形どころか稜線や段築線もそのまま得ることができます。

３．築造方法とパンデミック展開

築造に当たっては、周濠となる部分の土を段築に適用することで、すべて「現地調達築造」が可能です。また、「メサホ塚」設計図を使い土師氏の土木技術と結合すれば、全く相似形の巨大古墳築造が容易に可能です。

そして、単純な倍数ではなく黄金比も使えば、様々な大きさの築造が可能といえます。

左の写真は、東大阪文化財を学ぶ会、古代史講座で行った三十分の一モデルの造形実験です。基本的に「縄だけでつくれるもの」だということが実証されました。

設計―施工が一貫してシステム化されたことが百舌鳥・古市古墳群のパンデミック展開を生み出したといえます。

≪お知らせ≫

２０２０年は新型コロナウイルスに明け暮れた一年でした。会員の皆様方にとっても何とも生きづらい日々をお過ごしではなかったかと思います。

来年も歴史探訪、古代史講座ともに計画に基づいて実施させていただきますが、感染状況によっては、各例会の中止や延期、または日程、会場変更などの可能性がありますので、ホームページ**「歴史と街かど」**をご覧いただき必ずご確認ください。スマートフォーン、パソコンで Yahoo でも Google でも開くことができます。今後とも、健康に気をつけ共に頑張りましょう。では、佳いお年をお迎えください。